

## 「師友」

「師友」という言葉があります。

広辞苑では、先生として尊敬するほどの友人とあります。故 安岡正篤先生はその著「東洋倫理概論」で「われに親のないことは避けられぬ不幸である。しかし師友のないことは不幸の上に不徳ではあるまいか」「われわれは人生において、人格が真に確立し惑う事さえ無くなるまでには、常に威厳ある人格・品性・気魄・才能に接触してはじめて、自己を充実し向上させることが出来る。

天はこれが為に『師友』という者を与える。

師友はわれわれにとって第二次の父母兄弟であると書かれています。

良き「師友」を持つ事は、専門の知識や技能の様な「知識の学問」の域を超え、広い意味での「智慧の学問」を学ぶ事に通じると思います。

荀子は、本当の学問は就職や立身出世の為でなく「窮して困らず、憂えて意衰えず、禍福終始を知って惑わざるがためなり」と言っています。

私は今年64歳になりましたが、人生の醍醐味は魂を啓発する様な良き師、そして良き友を持つ事だとしみじみと思う様になってきました。

しかし、そうした「師友」との出会いは意外と少ないのが現実です。

安岡先生は、人の付き合いには、

1. 勢交（勢力者に交を求める）
2. 賄交（財力ある者に交を求める）
3. 談交（能弁家に交を求める）
4. 窮交（困窮のため苦しまぎれに交を求める）
5. 量交（利害を量って得な方に交を求める）

の「五交」が有ると言われています。

いずれも恥ずべきもので長くは続かない。

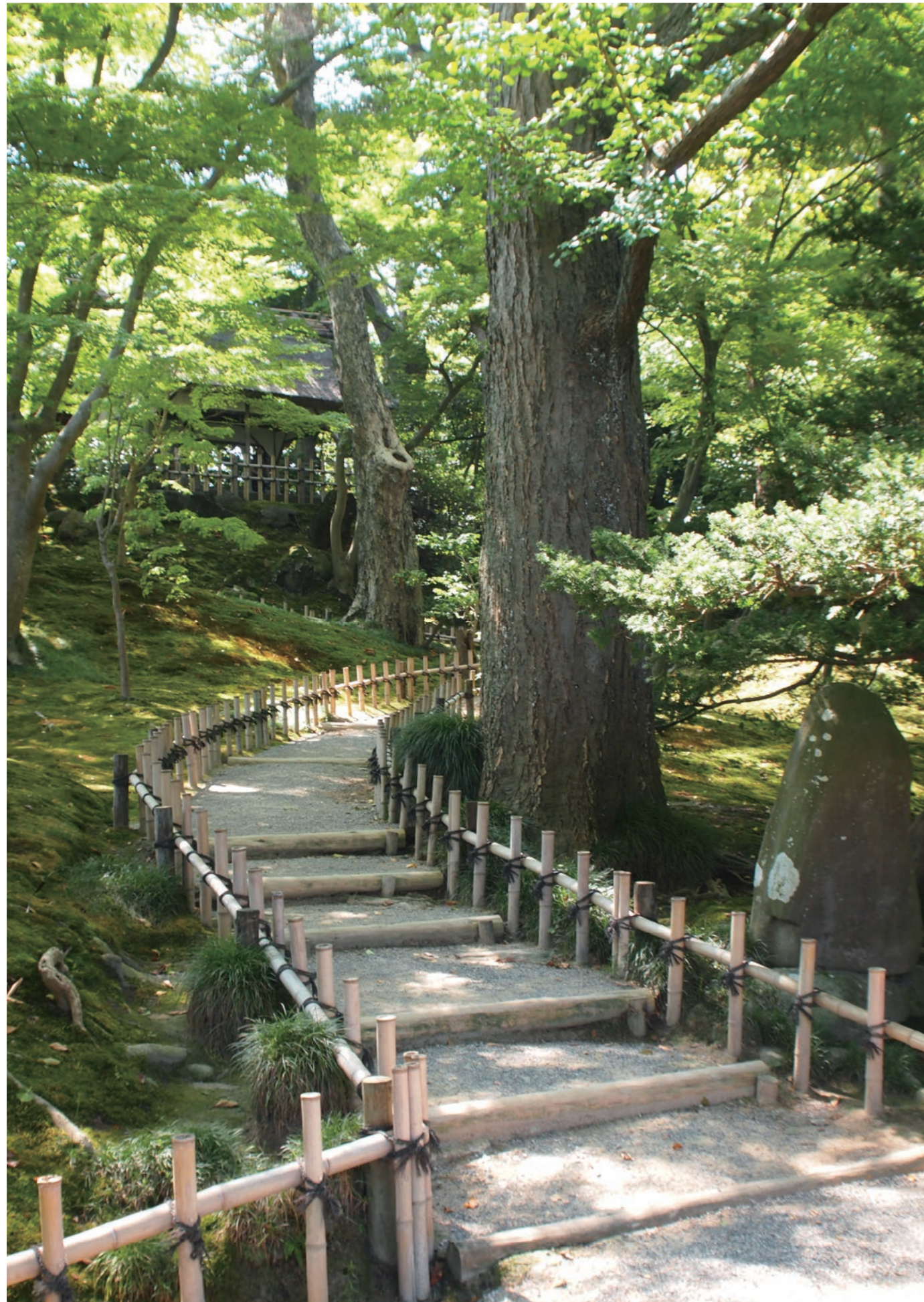
真の交わりというものには得難いものだとも言われておられます。

我々は限り有る人生を生きて、価値有る人生として終わってゆきたいと願わぬ人はいないと思いますが、その為には良き「師友」を持つ事、そして今は亡き偉人や賢人の遺した書物の中に心の「師友（尚友）」を探すのも趣の深い事の様に思います。

人が長く生きるという事は、親しい人達を亡くす事でもあります。良き「師友」はその死後においても、常に自分の心の中に生き続け、無言の啓示を与えてくれる存在でもある様に思います。

IT技術の進歩と平行して、真偽さえ定かでない情報があふれ返り、またそうした情報が一人歩きして虚像の人物像や企業イメージ等をつくり上げてしまうリスクの高い現代社会において、直接自分の目で観て、耳で聴いて、肌で感じて、自ら判断して「師友」を求めてゆく地道な努力をしてゆきたいものです。

徳真会グループ  
代表 松村 博史



撮影場所：兼六園（石川県金沢市）